

SD 法を用いた弱視者の色彩感情の検討

○高瀬葉実
(筑波大学人間総合科学研究群)
KEY WORDS: 弱視 色彩感情 SD 法

柿澤敏文
(筑波大学人間系)

【目的】

本研究では SD 法を用いて弱視者の色彩感情について、晴眼者と比較しながらその特徴を検討した。また、弱視者に関わる環境のデザインを構築する場面において、その心理的効果が期待できる色彩の選択に関わる 1 つの知見とすることを目的とした。なお、本研究の実施に当たり筑波大学人間系研究倫理委員会の承認（筑 2020-89A）を得た。

【方法】

対象者 視覚障害関連施設 2 施設の弱視の生徒・学生合わせて 17 名と、A 大学の晴眼の学生 16 名を対象とした。一部未回答があった弱視対象者 2 名の回答はデータ分析の対象から除外した。

質問紙 刺激として 7 種類の色名「赤」「黄」「緑」「青」「紫」「白」「黒」を提示した。SD 尺度として 14 種類の形容詞対「良い—悪い」「軽い—重い」「好きな—嫌いな」「明るい—暗い」「美しい—汚い」「暖かい—冷たい」「緊張した—緩んだ」「危険な—安全な」「動的な—静的な」「鋭い—鈍い」「派手な—地味な」「陽気な—陰気な」「目立つ—控えめな」「安心な—不安な」を用いた。

手続き 対象施設の責任者に研究実施の依頼を行い、対象候補者を紹介頂いた。大学での実施については対象候補者に直接研究参加の依頼を行った。対象候補者のうち、研究参加の同意が得られた者に、①google フォームを利用した web 調査、②調査用紙を利用した郵送法調査のいずれかで調査を実施した。①は弱視対象者 15 名と晴眼対象者 16 名に、②は弱視対象者 2 名に適用した。

分析方法 各形容詞対について、両極を「とても」として 1 および 5、真ん中を「どちらでもない」として 3、「やや」を 2 および 4 とする 5 段階の間隔尺度とみなして得点化した。各色名に対する各形容詞対の得点の平均値を弱視・晴眼別に求めて折れ線グラフに表したセマンティック・プロフィールを作成した。また、エクセル統計（社会情報サービス社製、Ver.3.21）を用いて最尤法・バリマックス回転による因子分析を行った。さらに、js-STAR（Ver. 9.8.7j）を用いて各因子について分散分析を行った。

【結果】

各色名に対するセマンティック・プロフィールを作成した結果、弱視者と晴眼者の色彩感情はおおむね類似した傾向を示した。しかし、弱視者と晴眼者で差異がみられた項目もあり、特に青については 6 つの形容詞対で平均値に 0.5 点以上の差異がみられた。

さらに、最尤法・バリマックス回転による因子分析を行った結果、3 因子が抽出された。第 1 因子は「陽気な—陰気な」、「明るい—暗い」、「動的な—静的な」の形容詞対に代表されることから「明朗性因子」と名付け、固有値は 4.0038、寄与率は 28.60%であった。第 2 因子は「美しい—汚い」、「良い—悪い」、「好きな—嫌いな」の形容詞対に代表されることから「評価性因子」と名付け、固有値は 2.7834、寄与率は 19.88%であった。第 3 因子は「緊張した—緩んだ」、「危険な—安全な」、「鋭い—鈍い」の形容詞対に代表されることから「柔和性因子」と名付け、固有値は 2.1985、寄与率は 15.70%であった。

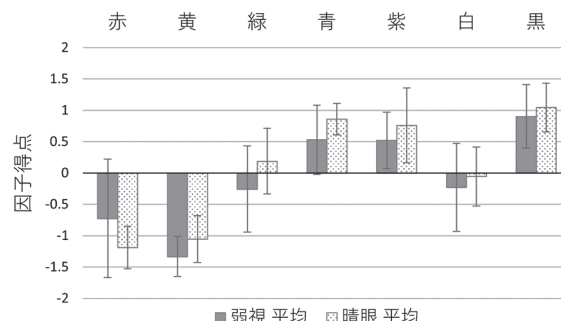


Fig.1 第 1 因子の各色名の因子得点の平均と標準偏差

Fig.1 は、第 1 因子の各色名の因子得点の平均値と標準偏差である。平均値が負の方向に大きいほど明朗性が高く、正の方向に大きいほど明朗性が低いことになる。弱視・晴眼ともに、赤と黄は明朗性が高く、青・紫・黒は明朗性が低い傾向にあり、緑と白は中間を示した。各因子の因子得点について分散分析を行った結果、第 1 因子「明朗性因子」では、弱視・晴眼の間に黄と青で有意差 ($F(1,29)=4.71$ $p<.05$ と $F(1,29)=4.36$ $p<.05$) が、赤と緑で有意傾向 ($F(1,29)=3.20$ $p<.10$ と $F(1,29)=3.88$ $p<.10$) が認められ、その他の色名では有意差は認められなかった。多重比較の結果、弱視者は赤より黄の方が明朗性が高い印象を持っていたが、晴眼者では赤と黄の明朗性の印象に差異はみられなかった。第 2 因子「評価性因子」では、いずれの色名に対しても弱視・晴眼の間に有意差は認められなかった。第 3 因子「柔和性因子」では、弱視・晴眼の間に白で有意差 ($F(1,29)=4.69$ $p<.05$) が、黄で有意傾向 ($F(1,29)=3.95$ $p<.10$) が認められた。その他の色名では有意差は認められなかった。

【考察】

本研究では、弱視者は晴眼者とおおむね同じ色彩感情を持っていることが確認された。惠羅・菅原・大庭 (2019) の先行研究でも、晴眼児と視覚障害児は色彩語の意味記憶特性についてほぼ同様の傾向を示しており、視覚の状態は色彩の印象には大きく影響しないことが改めて把握できた。よって、弱視者に関わる環境のデザインを構築する場面でも、晴眼者と同じ色彩の心理的効果が期待できることが示唆された。一方、一部の色名に関しては弱視・晴眼で違いがみられた。青のセマンティック・プロフィールにおいて差異がみられた形容詞対から、弱視者の方が晴眼者よりも青に対してポジティブな印象を持っている可能性が示唆された。また、因子別に因子得点の分散分析を行った結果、弱視者と晴眼者では多くの色に対する明朗性の印象が異なったことから、デザインにおいて明るい印象を与えたい場合には、その違いに考慮して色彩を選択する必要があると考えられる。なお、弱視者の因子得点にはばらつきがあり、弱視者の疾患などによる色彩感情の違いについて今後検討を進めることが課題である。

【文献】

惠羅修吉・菅原まゆ・大庭重治 (2019) 視覚障害児における色彩語の意味記憶特性. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 25, 19-23.
(TAKASE Hami, KAKIZAWA Toshibumi)